

女子性器結核の統計的観察

岡山大学医学部産婦人科学教室（主任：八木教授）

杉原昌太郎

豊田信三

〔昭和32年7月24日受稿〕

緒言

女子性器結核に関する報告は従来多数になされているが、その統計的観察には研究者によつて幾分の相異が認められる。筆者等は、当教室の昭和9年（1934年）1月から昭和30年（1955年）12月までの満22年間の入院患者総数14965例の中より性器結核121例について統計的観察を試みたのでここに報告したいと思う。

なお、対照としては同期間中の入院患者中で性器結核以外のものを各年度ほぼ同数ずつ合計109例を無選択にとつた。

1. 頻度

当教室における女子性器結核の頻度は、昭和9年より昭和30年までの全期間を通じて入院患者14965例中性器結核121例で0.8%である（第2表）。各年度の例数は第1表に示すように、最高は昭和30年度の11例、最低は昭和12年の1例である。これを試みに戦前の昭和12年までと、戦争中及び戦後の食糧事情その他一般生活状態の悪かつたと思われる昭和13年より昭和24年までの期間、及びそれが改善されてきたと思われる昭和25年より昭和30年までの期間の3期に分けてみると、第2の期間が最高率で第3の期間がこれに次ぎ、第1の期間が最低率を示している。

久保（1956年）は1940年より1954年に至る間の外来患者について5.1%、又身体他部の結核で化学療法を受けつつある結核療養所の患者では26.5%と言ひ、筆者等の例とはほぼ同じ期間のものであるが著しく高率である。また篠田は外来患者について4.77%と言つてい

る。Kvascs（1943）、Krönig（1911）は附属器腫瘍の10～15%に、又 King は炎症性下腹部疾患の5.8%に性器結核が見られると言つている。

なお剖検例においては馬島は女屍中の

第1表 年 度 別 例 数

年 度	性 器 結 核	入 院 総 数
昭 9	3	560
10	2	473
11	3	491
12	1	567
13	8	702
14	10	757
15	4	751
16	9	715
17	4	633
18	6	667
19	7	722
20	3	384
21	6	492
22	7	760
23	9	715
24	6	722
25	2	855
26	2	793
27	4	859
28	7	774
29	7	772
30	11	801

第2表 年 度 別 頻 度

年 度	昭9～12	13～24	25～30	9～30
性器結核	9	79	33	121
入院総数	1991	8120	4854	14945
百 分 率	0.41	0.97	0.67	0.8

8.27%, 阿保は9.9%と言っている。

2. 年令別頻度

年令について見ると最若年21才, 最高令は54才である。10年毎に区切ると(第3表) 21

才から30才に至る間52.0%で最高率であることが判る。次いで31~40才, 41~50才, 51才以上, 20才までの順になっている。これに対し対照の方は41~50才が最高で31~40才, 51

第3表 年令別

年令	~20	21~30	31~40	41~50	51~
性器結核(%)	1 (0.8)	63 (52.0)	42 (34.6)	12 (9.0)	3 (2.4)
対照例	0	16 (14.6)	27 (24.7)	43 (39.4)	23 (21.1)

第4表 40才前後の比較

年令	性器結核	対照
40才以下	106	43
40才以上	15	66
計	121	109
百分率	87.6	39.4

才以上, 21~30才, 20才までの順により, 性器結核例と対照例との間に著しい相異がある。次に40才の以前と以後に分け対照と比較し推計学的に検討するに, 40才以前において, 有意に多い(危険率5%, $Z_{82}=58.0$)。即ち性器結核は40才以下の若年者に多く, 特に21~30才の間に最も多く21才以上では年令が進むにしたがつて少く20才以下ではきわめて少いことがわかる。

稲見は108例の開腹例について検討し性器結核の年令分布は21~40才に91.7%であると言ひ, 貴家は573例について30才以下が60.4%, 篠田は210例について21~35才間に149例, 笹森は21~40才間に85.7%で, 26~30才間に34.3%, 久保は912例について26~30才の間が最も多く37.0%, 次いで21~25才, 31~35才で30才以下61.5%で過半数以上を占めると言っている。これらはほぼ筆者等の例と一致している。

3. 主訴

性器結核の来院時の主訴を調査すると第5表の如くである。なお, 主訴が2つ以上あるものはその内特に患者の強く訴えるもの一つをとつた。不妊が最も多く42.1%の高率を占めている。次いで遙かに低率になつて, 不正性器出血, 下腹部痛, 月経障碍, 腰痛, 帯下,

下腹部腫瘍, 下腹部緊張感, 下腹部不快感の順で以下下腹部膨隆, 頭痛, 血尿が各1例である。また, 月経異常の種類もきわめて多い。これで判るようにその訴えは多種多様で, ほとんど婦人科における訴えの内の主なものを含んでいる。特に不妊が抜群の高率で第1位を占めることは, 以下にも論ずるように性器結核の不妊に対する重大な意義を思わせる。

久保も性器結核の内不妊を主訴とするものが35.5%で最高率でそれに次ぐものは下腹部痛で25.4%であるといひ筆者等の例とほぼ一致している。笹森は不妊, 下腹痛, 月経異常, 腹部膨満感, 帯下であると言ひ, 貴家は下腹痛(35.0%), 不妊(31.9%), 帯下(16.9%),

第5表 主訴の分類

主訴	例数	百分率
不妊	51	42.1
不正性器出血	17	14.0
下腹部痛	15	12.3
無月経	5	4.1
過多月経	5	4.1
過少月経	1	0.82
稀発月経	1	0.82
頻発月経	1	0.82
月経不順	1	0.82
月経困難	1	0.82
腰痛	7	5.7
帯下	4	3.3
下腹部腫瘍	4	3.3
下腹部緊張感	3	2.4
下腹部不快感	2	1.6
下腹部膨隆	1	0.82
頭痛	1	0.82
血尿	1	0.82

月経異常 (14.3%), 腰痛 (11.6%), 無月経 (10.9%), 出血 (9%) と言っている。これら何れも不妊, 下腹痛が主位を占めていることは筆者等の場合と同様である。

4. 経産度との関係

性器結核例においては, 未産婦が最高率で過半数以上の71.0%を占め1回経産～5回経

第6表 経産度との関係

バラ	0	1～5	6～10	11～
性器結核(%)	86(71.0)	31(25.6)	4(3.3)	0
対 照	20(18.3)	62(56.8)	27(24.7)	0

産の25.6%, 6回経産～10回経産の3.3%の順に減少している。しかるに対照においては1回経産～5回経産の間が最高で, 6～10回経産の間, 未産婦の順となつている。これを推計学的に検討すると, 対照に比し, 性器

第7表 未産婦と経産婦の比較

バラ	性器結核	対 照
未 産 婦	86	20
経 産 婦	35	89
計	121	109
百 分 率	71.0	18.3

結核例には未産婦が有意に多いことが判る ($\chi^2=64.1$, 危険率5%)。性器結核例の内未婚者は3例, 対照例の内未婚者は1例であるから既婚者のみについて見ると未産婦は性器結核例に83例, 対照例に19例でこれでも未産婦は性器結核に有意に多いことが判るのである ($\chi^2=63.3$, 危険率5%, 第8表)。この様に性器結核は不妊と密接な関係があることを知るのである。

第8表 未産婦と経産婦の比較
(既婚者のみにつき)

バラ	性器結核	対 照
未 産 婦	83	19
経 産 婦	35	89
計	118	108
百 分 率	70.3	17.5

このことに関しては久保は既婚者の性器結核の69.1%は不妊であると言っている。

Haines M. も不妊患者の4%に性器結核があると言ひその重要なことを指摘し, 水谷, 藤井等もこのことを強調している。

5. 結核性既往症との関係

性器結核患者121例中明らかに結核性既往症を認めたもの72例59.5%で過半数を占めこれに対し対照109例中に明らかに結核性既往症を認めたものは5例4.5%に過ぎない(第9表及び第10表)。推計学的にも性器結核例

第9表 結核性既往症

	性器結核(%)	対 照 (%)
肺 結 核	4 (5.5)	1 (20)
肋 膜 炎	35 (48.6)	3 (60)
腹 膜 炎	13 (18.0)	1 (0)
骨 関 接 結 核	1 (1.3)	0 (0)
泌 尿 器 結 核	0 (0)	0 (0)
*2種合併したもの	19 (26.3)	0 (0)
計	72	5

* 2種以上合併したものの内訳

肋膜炎+腹膜炎……………13例

肺結核+骨関節結核…1 "

肺結核+腹膜炎……………2 "

肺結核+肋膜炎……………2 "

骨関節結核+肋膜炎…1 "

第10表 結核性既往症あるものとなないものとの比較

結核性既往症	性器結核	対 照
あ り	72	5
な し	49	104
計	121	109
百 分 率	59.5	4.5

に有意に多い。結核性既往症の種類では, 肋膜炎が48.6%で第1位を占め, 遙かに下つて腹膜炎の18.0%以下肺結核, 骨関節結核の順となつている。しかし2種類の結核の合併したものが19例(26.3%)を占めている。その内訳は第9表右側に示すようである。

これに関しては久保も肋膜炎が最も多く

55.7%, 次いで腹膜炎, 肺結核 (夫々23.8%) の順であるといひ, 笹森は性器結核 212 例について, 肋膜炎70例, 腹膜炎45例, 肋腹膜炎24例, 肺門リンパ腺炎 7 例, 骨結核 3 例, 早期浸潤 3 例, 肺尖炎 3 例, 腎臓結核 3 例といひ, 貴家は肋膜炎36.5%, 腹膜炎14.5%, 肋腹膜炎13.4%, 肺結核9.7%, 腎臓結核2.7%で結核性既往症ないものは僅かに21%にすぎぬと言う。又篠田は性器結核210例について, 肋膜炎36例, 腹膜炎30例, 肋腹膜炎23例, 肺結核17例, 腎臓結核 5 例といひ, 水谷は肋膜炎29.4%, 腹膜炎16.8%, 肋腹膜炎11.2%, 肺結核9.1%, 肺門リンパ腺結核4.9%, 骨結核4.2%, 腹結核2.1%, 泌尿器結核 1.4 %といひ, 又稲見は肋膜炎45.3%, 腹膜炎30.5%, 肋腹膜炎7.4%, 肺結核12.9%, その他8.3%で結核性既往症ないものは17.6%にすぎないと言う。これらすべて肋膜炎が他のものに比し隔絶して高率であること及びその順位については筆者等の例と一致している。肋膜炎は特に性器結核の既往症として重要であることが判るのである。なお性器結核の部位別と結核性既往症を有するものの割合との関係を見れば第10表の如く腔部結核, 結核性内膜炎, 結核性卵管炎の順に少くなっている。

6. 罹患部位別の割合

卵管, 子宮腔部, 内膜の3つに分ち罹患部位別の割合を示すと第11表のようである。な

第11表 性器結核の部位別と結核性既往症

結核性既往症	結核性 卵管炎	腔部結核	結核性 内膜炎
あり	60	7	4
なし	43	4	3
計	103	11	7
百分率	48.5	63.6	57.1

第12表 部 位 別

部位	例 数	百分率
卵 管	103	85.1
腔 部	11	9.0
内 膜	7	5.7
計	121	100.0

お2種類に互るものはその内主要な方をとつた。卵管が過半数以上の85.1%を占め遙かに下つて腔部, 内膜の順である。卵管結核の重要であることがわかる。

7. 月経異常との関係

月経異常は主訴としても第3位を占め重要なものと思われるので, これと性器結核との関係を検討した。月経異常には, 無月経, 過多月経, 過少月経, 頻発月経, 稀発月経, 月経不順, 月経困難を含む。閉経後のものは, 性器結核の発病の時期がわからない上閉経後短期間のものであるので閉経前にさかのぼつて月経異常を調べた。第13表の如く性器結核

第13表 月経異常との関係

月経異常	性器結核	対 照
あり	56	28
なし	65	81
計	121	109
百分率	46.2	25.6

例には46.2%で対照の25.6%に比し多く, 推計学的に検討しても有意差を認める ($\chi^2=10.4$, 危険率5%)。月経異常は性器結核患者に多いことが判る。

8. 結核性腹膜炎との関係

結核性腹膜炎を現に有するもの又は既往症として有つてゐるものは第14表に示す様に性

第14表 結核性腹膜炎との関係

	例 数	百分率
結核性卵管炎	56	54.3
腔部結核	1	9.0
結核性内膜炎	0	0
計	57	47.1

器結核例の47.1%でこれを種類別に分けると結核性卵管炎においては, 103 例中 56 例で54.3%で過半数である。これは卵管結核と結核性腹膜炎との密接な関係を示すものである。Amann, Aschoff, 石塚, 倉島, 馬島などは結核性腹膜炎なき原発性の卵管結核の存在を否定している位である。又稲見も卵管結核の

大部分は腹膜結核より続発したものであるという。

9. 外来診断

性器結核は外来において如何なる診断をつけられているかということを検討すると第15表の様である。子宮發育不全が21.4%で第1

第15表 外来診断の分類

外来診断名	例 数	百 分 率
子宮發育不全	26	21.4
子宮後屈	18	14.8
慢性付属器炎	15	12.3
子宮腔部癌	10	8.2
卵巣嚢腫	10	8.2
子宮筋腫	10	8.2
子宮腔部結核	6	4.9
結核性付属器炎	2	1.6
結核性卵管炎	1	0.8
付属器腫瘍	4	3.3
付属器炎	2	1.6
筋層内膜炎	2	1.6
卵管溜膿腫	2	1.6
腔部ビラン	1	0.8
メトロパチー	1	0.8
機能性出血	1	0.8
粘膜ポリープ	1	0.8
結核性腹膜炎	1	0.8
切迫流産	1	0.8
頸管カタル	1	0.8
タグラス膿瘍	1	0.8
卵管流産	1	0.8
腹水	1	0.8
骨盤腹膜炎	1	0.8
子宮の腫瘍	1	0.8
卵巣機能不全	1	0.8

位を占め子宮後屈14.8%, 慢性付属器炎12.3%がこれについている。この3つを合せると48.5%ではほぼ半に達する。貴家によると慢性子宮付属器炎が第1位で47.4%を占め、慢性亜急性腹膜炎12.7%, 發育不全8.2%の順となつている。又篠田によると慢性付属器炎と

炎症性付属器腫瘍の2つで46.2%を占める。このように性器結核は、慢性子宮付属器炎や子宮發育不全と診断されることが多い。

結 論

1. 昭和9年より昭和30年に至る満22年間の当教室入院患者中の性器結核例121例について統計的観察を試みた。

2. 頻度：全入院患者に対する割合0.8%である。

2. 年令：21才より54才までの間に分布している。21才から30才までの年令層に最高率で過半数の52.0%を占める。40才を境としてその前後に分つと40才前に、対照に比し有意に多い。

3. 主訴：主訴は多種多様で婦人科における訴えのほとんどのものを含むが、不妊が42.1%で最も多い。

4. 経産度との関係：未産婦が、70.3%で対照に比べ有意に多い。

5. 結核性既往症：明かに結核性既往症を有するものは59.5%で過半数を占め、これは対照に比べ有意に多い。結核性既往症の中では肋膜炎が48.6%で第1位を占める。

6. 罹患部位：卵管が第1位で85.1%を占める。腔部(63.6%), 内膜(57.1%)は遙かに低位にある。

7. 月経異常：性器結核46.2%に月経異常を認め、これは対照に比し有意に多い。

8. 結核性腹膜炎 結核性腹膜炎を現に又は既往症として有つものは47.1%で、結核性卵管炎のみについては54.3%に及ぶ。

9. 外来診断：子宮發育不全が最も多く子宮後屈、慢性付属器炎等の外来診断がそれに次ぐ。

擧筆するに当り終始御懇切な御指導御校閲を賜つた恩師八木教授に深甚の謝意を捧げます。

献

1) 笹森：日産婦会誌，39巻，1号，43頁，昭19.

2) 貴家：産と婦，19巻，5号，288頁，昭27.

3) 貴家：結核，10巻，10号，644頁，昭28.

4) 篠田：日本臨牀，5巻，151頁，89頁，昭22.

5) 沢崎：最新医学，4巻，9号，516頁，昭24.

6) 馬島：日産婦誌，5巻，5号，416頁，昭28.

文

- 7) 笹森：日産婦誌，5巻，6号，481頁，昭28，250，1938.
- 8) 藤井：日臨牀，7巻，2号，56頁，昭23.
- 9) 稲見：日産婦誌，5巻，6号，475頁，昭28.
- 10) 久保：日産婦誌，8巻，13号，1485頁，昭31.
- 11) 宮野：日産婦誌，9巻，6号，589頁，昭32.
- 12) Kvascs, F.: Mschr. f. Geburth u. Gynäk. 116, 24, 183, 1943.
- 13) Krönig, J. E.: Am. J. Obst. & Gynec. 34, 76, 1911.
- 14) King, J. E.: Am. J. Obst. & Gynec. 35, 250, 1938.
- 15) Bobrow, M. L. & Batts, J. A.: Am. J. Obst. & Gynec. 64, 1242, 1952.
- 16) Haines, M.: J. Obst. & Gynec. Brit. Emp. 59, 721, 1952.
- 17) Amann, J. A.: Zbl. f. Gyn. 40 Jhg. 365, 1916.
- 18) Aschoff: Deutsch. Med. Wochschr. 31, 1461, 1911.

STATISTICAL STUDIES ON THE FEMALE GENITAL TUBERCULOSIS

By

Shotaro Sugihara, M. D.

Nobuzo Toyoda, M. D.

(From the Department of Obstetrics and Gynecology Okayama
University Medical School, Director: Prof. H. Yagi)

The author observed 121 cases of genital tuberculosis among the in-patients of the Department of Obstetrics and Gynecology Okayama University Medical School, during 1934 to 1955. For the purpose of comparison, 109 in-patients during the same period excluding tuberculosis of genitalia were investigated. Its incidence was 0.8%. The youngest age was 21 years and the oldest 51 years.

Chief complaints consisted of various kinds of gynecological natures. Nullipara was most frequent in ratio, and those who had previous history of tuberculosis were 52.5%, which were significant in number in comparison to the control cases. Menorrhagia was present 46.2% and site of tuberculosis was the most frequent at the Fallopian tubes (85.1%).

In the majority of cases was a clinical diagnose as hypoplasia uteri was given, then followed retroflexion or chronic adnexitis.